

# 仏作って魂をいれる

## —安全対策によるリスク低減—

特定非営利活動法人「温故創新の会」 大長 欣弘



安全対策には、これまで膨大なエネルギーをつぎ込んできたにも拘わらず、①「大震法」の撤廃、地震動予測やハザードマップはいらない②高い防潮堤が津波の被害を大きくした③無駄な安全対策は油断を生み事故に繋がる等々の議論がある。単純にこれらの主張に加担することはできない。災害発生は避けられず、それでも安全対策を遂行するには、人間行動と地震に代表される科学・工学の限界を認識し、知見と行政の仕組み等を総動員して被害軽減を図り安全の向上に努める外にない。戒めとして、地震予知は不可能に近くその前提条件やリスクを人々に真摯に説明すべきである。

図-1 は、ハードウェアと人間行動が生み出すリスクを減らす方法を示す。自然災害や交通事故には、環境としてのハードウェア（ダム、防潮堤、道路、信号システム、車等）とそこに居る／使う人間行動のアウトプットとしてのリスク、即ちネットとしてのリスクは、人間が受け入れるリスク水準が変わらない限り変わらない。安全対策としてダムや防潮堤新設、道路改修、安全装置（ABS装着）等は、安全に向かってリスクを大きく低減する。それに応じて、リスクの低減した分は、ベネフィットとして注意力の低下、安心と油断、安全にアグラ、速度アップ、カーブ追込等の効率性や快適性を求めてリスクを取る行動に変わるが悲観しない。一般人のリスク水準は、ベネフィット志向と安全志向の中間（点線）となると言われる。更にリスク水準を下げるには、安全への動機づけ鍵として①誇り高く生きる②将来に希望を持つことができる社会を創ることの2つが、より安全な日本（基盤+人間）になると主張する。

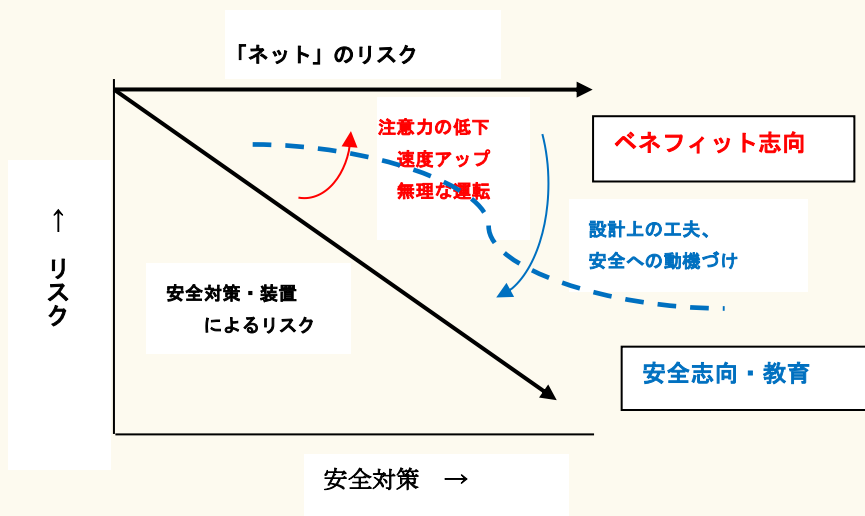


図-1 ハードウェア+人間行動が生み出すリスクを減らすには\*-1

\*-1 参考文献：芳賀 繁「事故がなくなる理由」PHP 新書 p.68 図3-4、一部加工・抜粋